

# Memoirs of a Geisha における Hatsumomo の自己崩壊と芸者制度下の女性像

陳 懌懿

## 1. 序論

Arthur Golden の小説 *Memoirs of a Geisha* (1997) は、戦前から戦後にかけての京都・祇園を舞台に、少女 Chiyo (後の Sayuri) が芸者として過酷な運命に立ち向かい、自らの居場所を切り拓いていく姿を描いた物語である。これまで多くの先行研究は、Sayuri の主体性や成功が持つ意味に光を当て、経済的・性的支配の構造に抗う姿や、精神分析に基づく内面の相克、忍耐の果てに掴み取った自己実現として彼女の歩みを評価してきた。

しかし、Sayuri の対照的存在として描かれる Hatsumomo は、嫉妬深い「悪女」という型に回収されがちであり、彼女の破局が芸者制度という背景から十分に検討されてきたとは言い難い。彼女の崩壊は、単なる性格的欠陥ではなく、一人の女性としての切実な願いと、制度が強いる残酷な仕組みが衝突した結果生じた悲劇だったのではないだろうか。

本稿は Hatsumomo の「自己崩壊」を、外的抑圧と競争環境のもとで内的葛藤と敵意が増幅し、社会的基盤（信用・居場所・役割）を失っていく過程として捉える。具体的には、①芸者制度が生む劣等感、②制度上の成功と愛情欲求の葛藤、③それらを補おうとする過剰な攻撃性、という三つの視点から彼女の軌跡を考察する。

## 2. 競争構造と劣等感

芸者は一般に「芸を売る女性」と理解されるが、その背後には美貌や境遇によって少女の人生が選別される冷酷な現実がある。宇沢美子 (2010) が指摘する「抱えの芸者」という境遇は、本作の Hatsumomo にも当てはまるだろう。彼女は置屋の娘ではなく、その美貌がなければ Chiyo の姉 Satsu のように売春宿へ送られていた可能性も否定できない。美しさは彼女にとって、生存そのものを賭けた資本だと考えられる。

しかし、その地位は常に不安定である。田中優子 (2016) が説くように、芸者の評価には熟練のみならず「新しさ」が求められる。すでに名声を得た Hatsumomo であっても、若さの喪失と後進の影に怯え続けねばならなかった。Auntie が彼女を「成功した者を憎む」(Golden 76) と評した背景には、制度が植え付けた根源的な不安がある。

この不安を敵意へと変えたのが Chiyo の登場であった。Chiyo の瞳を「死んだ男の舌の色」(Golden 60) と貶める行為は、相手の価値を否定することで自己の優位を守ろうとする心理の表れである。Adler (2010) のいう「劣等感コンプレックス」の観点から見れば、彼女の攻撃性は、不完全な自己を不健全に補おうとする反応と理解できる。

彼女の敵意を個人の性格に還元することはできない。Lewin (1936) が述べるように、人の行動は個人と環境の相互作用によって形成される。芸者同士を比較し競わせる制度的環境こそが、Hatsumomo の劣等感と敵意を増幅させたのである。

## 3. 制度的成功と愛情欲求のはざままで生じる内面葛藤

芸者は華やかな役割を演じる一方で、舞台を離れば一人の女性としての素顔を抱えている。第 5 章で Chiyo が語る次の言葉は、その分裂された自己を象徴している。

… when a geisha wakes up in the morning she is just like any other woman... Only when she sits before her mirror to apply her makeup with care does she become a geisha. (Golden 61)

この言葉が示すように、芸者は職業的役割と私的な感情の乖離にさらされている。その矛盾を深めるのが「旦那」という制度である。物語における「旦那」とは、経済的支援を通じて芸者の生活と活動を支える存在であり、花街における成功はこの関係を得ることで実現できる。しかし Hatsumomo はその安定を欠いていた。

特筆すべきは、彼女が利害関係を伴う「旦那」ではなく、既婚の料理人 Koichi を愛情の対象として選んだ点である。Koichi との関係は彼女に金銭的損失をもたらし、将来を危うくするものだったが (Golden 69)、そこは芸者という役割を脱ぎ、「一人の女性」として承認される唯一の場でもあった。Maslow (2013) の理論に照らせば、この関係は彼女にとって切実な「愛と所属」の欲求を補うものであったと考えられる。

しかし、その居場所は Chiyo の目撃と告発によって崩壊する。恋人に縋る彼女の姿と、女将による身体検査という制裁は、彼女が必死に守ろうとした自己が制度によって蹂躪されたことを意味した。ここで彼女の内面には「公的な自己」と「私的な自己」の決定的な分裂が生じ、Chiyo への感情は地位への嫉妬から、尊厳を奪われた

ことへの恨みへと変質する。この感情の暴走が、自己崩壊を加速させていく。

#### 4. 敵意と攻撃性の裏にある過剰補償

Hatsumomo の不安は、Chiyo への苛烈な攻撃として噴出する。彼女は Chiyo を陥れる一方で、Pumpkin を妹芸者に据えて自らの派閥を固めようとした。この執拗な妨害は、Adler (1925) が説く「過剰補償」の典型である。自己の価値が脅かされる不安を、他者を支配し攻撃することで強引に埋め合わせようとしたのである。

しかし、この攻撃は皮肉にも Mameha と Chiyo を結びつけ、同盟を誕生させる。焦燥に駆られた Hatsumomo は、自らの信用を削ってまで Pumpkin に不正な稼ぎをさせるなど、西尾久美子 (2006) が指摘する花街の慣行を逸脱した非合理的な暴走を始める。自己を守るための攻撃が、かえって自らの社会的基盤を蝕むという悪循環に陥ったのである。後に Sayuri が置屋の養女となり、Hatsumomo の計画が瓦解した後の姿を、語り手は次のように描く。

She (Mameha) believed Hatsumomo was a woman bent on self-destruction, and that all we needed to do was to coax her along path she was certain to follow in any case... (Golden 324)

酒に溺れ、客に暴言を吐き、最大の資本であった美貌さえ失った Hatsumomo は、もはや誰が敵かさえ見失っていた。最後には宴席で醜態をさらし、かつて美の象徴だった女性は「怪物」(Golden 330) と呼ばれ、置屋から追放される。自己を維持しようとする過剰な攻撃が、皮肉にも居場所と尊厳をすべて奪い去る。彼女の終焉は、制度が生んだ歪みの中で、自らの抛り所を自ら食いつぶしてしまった女性の、孤独で凄絶な自己崩壊の記録である。

#### 5. 結び

本稿は、*Memoirs of a Geisha* における Hatsumomo の自己崩壊を、単なる悪役の転落劇ではなく、芸者制度の構造的な問題が生み出した悲劇として再考してきた。彼女の行動は、制度が強いる苛烈な競争と、満たされることのない内面的欲求との間で引き起こされた、魂の摩擦の結果であった。美貌への執着は劣等感を、競争は不安を、そして愛情欲求の挫折は精神の致命的な動揺を生んだ。自らを守るための過剰補償としての攻撃性は、皮肉にも自らの信用を奪う刃となり、彼女は最終的に、芸者としての体面も居場所も、すべてを喪失したのである。

彼女が最終的に芸者の地位を追われ、社会の周縁へと転落していく結末は、芸者制度が内包する残酷さを静かに物語っている。華やかな表舞台の背後で、芸者は常に周縁化の恐怖と隣り合わせであり、所属や愛情といった人間的欲求は、この制度下では正当な居場所を与えられない。Sayuri が語るように、Hatsumomo の破滅は決して例外ではなく、制度の歪みに呑み込まれていった多くの女性たちの、一つの象徴的な姿であったといえる。

Hatsumomo は記号化された悪女という枠を超え、制度の犠牲者として、また愛と居場所を求めて苦闘した一人の女性として再評価されるべきであろう。今後の課題として、Hatsumomo が崩壊した一方で、Sayuri や Mameha がなぜ適応し得たのかという戦略の差異が残されている。Mameha が説く「水」(Golden 125) の比喩が象徴するように、柔軟に制度の隙間を流れる生き方は、Hatsumomo の硬直した攻撃性との鮮やかな対比をなす。今後はこの多様な女性像の比較を通じ、閉鎖社会における生存の力学をさらに解明していきたい。

Hatsumomo という影が存在することで、Sayuri の物語は単なるサクセスストーリーを超え、文学的厚みと社会的批判性を帯びる。彼女の喪失は、読者に成功の裏側に積み上げられた犠牲の本質を問いかけている。本稿は、この光と影の両義性に注目することで、芸者制度下の女性像をより多角的に読み解く可能性を提示した。

#### テキストおよび主要引用文献

Adler, Alfred. *The Practice and Theory of Individual Psychology*. Translated by P. Radin, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., 1925.

Adler, Alfred. *What Life Should Mean to You*. Edited by Alan Porter, Martino Fine Books, 2010.

Golden, Arthur. *Memoirs of a Geisha*. Vintage Books, 1997.

Lewin, Kurt. *Principles of Topological Psychology*. McGraw-Hill, 1936.

Maslow, Abraham H. *A Theory of Human Motivation*. Martino Fine Books, 2013.

田中優子『芸者と遊び——日本のサロン文化の盛衰』角川ソフィア文庫、KADOKAWA、2016年。

宇沢美子「職業人としての芸者たち—戦前・戦後の日本を支えた花柳界の文化」『三菱財団研究助成・事業成果報告書』2010年、pp. 1-5。

西尾久美子『伝統文化産業におけるキャリア形成と制度——京都花街の芸舞妓の事例』神戸大学博士論文、2006年。